

生態系サービスとはなにか

日本の里山を例にして

湯本貴和（総合地球環境学研究所）

日本政府は、今年の洞爺湖サミットから 2010 年の生物多様性条約締結国会議（COP10、名古屋）に向けて、“SATOYAMA イニシアティブ構想”を日本からのオリジナルな発信と位置づけ、生物多様性問題の国際的なリーダーシップを発揮することをめざしている。現代に視点を置いた活動では、里山という概念について、近世から近代の水田耕作に強く依存した農用林をイメージとして、肥料や燃料を自給してきた循環的な農業を通じた「人間と自然との共生」の顕著な事例であると謳われることが多い。すなわち「里山とは昔から薪や柴をとったり、炭を焼いたり、落葉をかいて肥料にしたり、葉のついた枝や低木を伐って刈敷にしたり、山菜をとったりというように、さまざまな形で繰り返し人間が利用してきた自然である」とされる（田端 1997）。これを狭義の里山（正確には、里山林）とっておこう。

いっぽう、人間が“自然の恵み”を利用し、“自然の恵み”がより効率的に得られるように改変してきた自然を、里山あるいは里山的自然と広く定義することも可能である。人々が生活あるいは生業に必要とされる“自然の恵み”、すなわちミレニアム・エコシステム評価でいう“生態系サービス”（供給サービス、調整サービス、文化的サービス、基盤サービス）を得るために、生活圏内の自然を改変した結果として的人為的自然を広義の里山とする見解である。このように広義に里山を定義すると、水田に依存した人為的自然でも里山林だけではなく、ため池や用水路、さらには水田それ自体をも含めて里山的自然として考えることができる。さらに水田耕作だけではなく、生物資源あるいは生態系に深く依存しているさまざまな生業をもつ冷温帯から熱帯にいたるさまざまな地域やさまざまな時代に普遍的にみられるといってもよい。これにしたがえば、異なる時代や地域に里山概念を拡張して、“縄文里山”や“熱帯里山”という表現も可能であろう。あるいは、陸上生態系に限らず、人々が生態系サービスを得るために改変した川や海を、それぞれ“里川”、“里海”と呼ぶことも論理的に無理がない。循環社会と「人間と自然との共生」の実現に向けた国際発信とするならば、論理的にはこの広義の里山概念に依るほかはないだろう。この観点からみると、里山に人間が求める生態系サービスは地域や時代を通じてつねに一定のものではなく、気候風土によって異なり、同じ地域においても歴史的に大きく変わってきたことに、とくに注目する必要がある。日本の大部分の地域においては、1950 年代から始まった石油文化に依拠する燃料革命・肥料革命・材料革命によって、里山林の供給サービスへの需要が急速に衰えたことが、今日の里山林の“荒廃”につながっている。